

「あのさ、帝人君。俺の恋人にならない？」

唐突に、彼は言った。

「……は？」

ぽかん、として彼を見つめる。相変わらず眉目秀麗、という言葉がふさわしい男だ。柔和な笑みを浮かべ、聞き惚れるような声音で告げられた言葉。だが、その言葉に耳を疑った。

（えーと、新手的冗談とか？）

だが、そうだとしたら恐ろしく笑えない。

「その冗談ものすごくつまらないですよ、臨也さん」

「つまらなくて良いんだよ。だって冗談じゃないし。言い方が悪かったかな。バイトしない？」

「……………援交はちよつと」

たつぷり数秒の沈黙の後、どうにか言葉を紡ぐ。これが同性ではなく、異性だったとしても援助交際は強く遠慮したい。同性ならなおさらだった。

「そういうんじゃないくてさ、恋人ごっこというか、恋愛ごっこというか、そういう感じなんだけど」

「臨也さんの場合、そういうことはいつもしてるじゃないですか。ものすごく女の人に人気ありますよね？」

何しろ目の前の人物、折原臨也は美貌の持ち主だ。好みかは人によるが、誰もが美貌であることは認めるだろう。

ただし、性格はあまりよろしくないらしい、ということ。を今の帝人は知っている。だが、知り合った当初はそれなりに『いい人』だと思っていた。親友の忠告があつてもそう思えるくらいには、彼は演技が上手い。嘘も上手い。

と、なれば当然女性人気は高いだろう。彼は言葉を操るのも上手い。優しい声音で愛の言葉を紡ぎ、嘘を奏でるのはお手の物に違いなかった。顔が良くて、優しく、ついでに金も相当持っている様子なのだから、黙っていても女は寄ってくる。なにも自分と『恋人ごっこ』とやらを興じる必要は皆無のはずだ。そんなことをしなくても、いくらでも異性を選べるほどに群がるのだから。

実際、今まで何度か女性連れで歩く彼を見たことがある。池袋でもあるくらいなのだから、彼の住まう新宿ではもつと頻度上がるのかもしれない。自分が見た女性は毎回おそらく別人だったけれど、そのどれもが臨也に恋しているのだろう、ということが容易にわかる表情を浮かべていた。おそらくその恋に夢中なのだろう、と思うくらいに。

そんな男なのだから、恋人候補など無数に存在するだろうし、なぜ自分にそんな『バイト』とやらを持ち出してくるのか、理解できない。

「俺のことを好きな子じゃダメなんだ。お互いごっこ遊びってわかって割り切れてないと。その上で恋人ごっこを続けて、結末がどうなるのか知りたいからさ」

（うわあ。悪趣味だなあ）

言葉には出さなかったが、おそらく表情には出た。